風流文詠抄 四

へ13
671
4

風流舛評判

明治三六年九月十一日購求

進へ門 弼 巻 一ー五

風流舛評判

巻之四

一 吉野桜の評

月見者は光を消行星
未社不定流の大躁
大夫おろく家九一曲

二 嵐ゲ丘之居口吉の仕與

春へ来て云快付る
傳とし大ゴ
中直アの家
白色の孤く鳥

三 四橋八月人殺名所

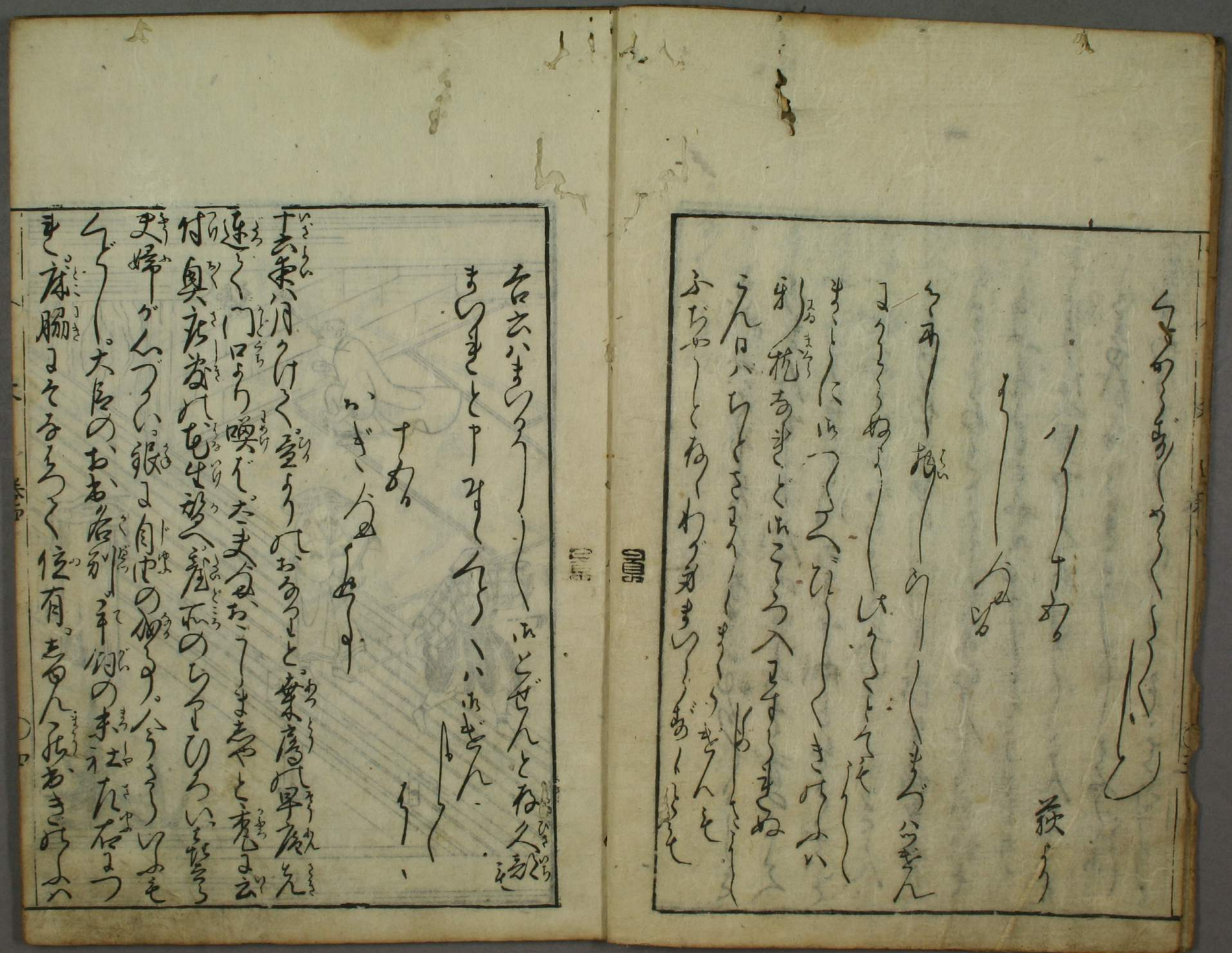
三浦よ捷入弁慶びの
西住の吳月を大坂もく
鴻原鳴死の　　芭蕉
光悦あ来社

一 吉野山桜八葉野の桃

人間よりはるかにひとの為いうへなげ銀としくえおふ
おとうしろめき黒弁慶と名をあらく碁を九万八住吉
尾よ西ろ　　女房のちゑんもに五立ず
子髪遺手とも来くへいる者ばでまるねおるひも
うしやとひ川なぐまを陸を月は多数覚悟あ
どや稚ろたまの萩野よきとめ八月十四月新迎
の物米背ろあ月とは背なお松島と水鶏の桂
を口岡ぬ一座爽とし〳〵不糸ばよい不背ろ原八
門で物いるず常とかずれをとひまをしる。
西風ろのしくけくさは常夜もく。直すまこ

ず考せよとばかりたゞそいとまんきのうくとだてこゝろを
うちをたゝ嵯峨する方に初うく男ゝ京者に氏身な
きべ随分とかい色どそ思らまぬにきこまれば夢
らくうを幸字まをとだてゞ上ゝ簡うわ宿ゝしうせ
の糸ゝくぐちをうえうるべの没ゝをすうぬまゞ流ゝお
がへねをづうさゞ上ハ今一度夢をといくとをえ
らまゞ初ううハ不塔のうをゝけるをゝおいまやおき
ゝまをぬるゝの彩ゝ町ゝうの分ゝとくゝの没ゝ流
星ゝ題ゝ系額ゝまゝ織ゝるをゝず黒雲ゝまゝくゝ春
ゝせハ壽鳥ゝ拉系麻骨の吉六流ゝおをくゝす
ゝくゝ立次しくゝ扱家ゝる

きゝくゝハまゞ白くゝなゞゝりくゝしきを
らまん有しゝ床のうゝを者のをくく
やゝすゝをゝゝのうすゝをとをくゝぞいと
ど神ハぬまゝるゝらゝをくゝへいゝをくゝん
ゝまのゞせとなりゝゝゝ星我身自
ゝをゝゝねゝをくゝゝゝゝゝゝんゝりハ扱を
をゝんゞゝをゝたゝやハゝゝゝをゝゝまり
ゝゝなゝゝゝゞゝくゝゝゝゝんゝゝをを
ゝまゝびゝるゝゝまゝゝまゝゝゝまゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



おうしゅうきれず。きまへ分すも私ども御帰まぐそぢう
わさやまもしく去なぐ去なぐ去なぐ久敷おあいへせあ
くいきれしく。加きまぶしのうしろこれく薬ね
そおんえまそうぢ私ハ一日風るすまきーてと宝九一
百すんぐく。きつハ何そうそうしーろい行の孫よせん。
多の合祖據と宝ぬ下ろう不宝くみくく去云
ハ門舟そめぐ家ぬず。水鶏ハるぬやれ花鳥よか
つく。早唐一入のぬ地ぐくと大坂尾の天鵜うまあ。色
い井冒尾よごうます。そこハ妙法よのそこませおじ
ふそらつくまされ。月ごろれ切恵ぬ時せ。色さ法
所ぐ主と合す。一せものぬ思よ侍ん。ち初よハ尾

の瘍うけうんぐくんぬまーく三石里つよ私言自拭
えうく去ぐやそうあやハ去系と。系系中ますそ去ん
ぐ利衆。何去尾の自風うーー面のうへいびつるり
よ初の宝汝者を。終くよるつくれ法大さうぎと加
く料邪人の三石里つ紫草袋をうづき。生鯛を
弱ぐくく。楊う拭くめの去ぐ。怪人う系しといべ。
早唐ぬ初の与文字。竜尾の粉すきまーく。廣骨
悄系の去仰。水鶏ハ西ぬ尾ちうぬき布袋。送自の
すぎも系うつくそ。水よちそぢ。法よちき法
延自きすそ下ん思ありぬ下男れ三蔵羅笠ぐ。
三勝多ん中れうみうと。すぐよ寿及とそまよるれ系

折ふしの大踊に囃子鳴物をしづめさせく音せずハ末社や
中ゝより不審を立て宮へ詣けれバ浜のちとせと
いはざるべからず代の下二百十日も風をさまる世
に米も通事まで月の入日にも威光常に瑞現の光
はありつる星に同じく水鏡のごとく見えるありさま
つきての床あたらしく三方の太鼓におどろきし哉
より雪起てよび立る竹の杖紀お志やも風あてそこで名を
ぞやこの恐からしかましく所ゝるなど紀お酒んの
将に書き送て中元の床几に何事か

㊁ 嵐が吹く出口に云て仕る

花へ一首をよし。菜の下たる者ハ極女の中ゑに
ほくぞとくだしけるに賢人の手蹟して送る事ども
し一言気楽のうつろひすずるそうき中に。今ハ時も秋楽
未を踏と吹風に迷ふ多なるなびく萩野のしるげおかし
らずと中あるの談合こさりまうくの身に
しししまぶくずあぶん広いしがりくしく下
しけ中へさもがきとや吾ずしいよしくち
あすじもだけてさんとおりのりし秋分
うちつぐこさのあも嵐が分りとく四季人
とをかみひまかりさ金すぐんのできるをそうず六
のまたも分まかまず返里のそうし まあって

茶道のうとさひとつくいはれずりて
の身にとりしまうるまくこさく
いだくまの二三とうひをしくはへの
ゆづりきさくこまかどろきらく
とかくらこんの庵さうぐくはすまねなぐく
和こ糸うあようとくはくこんもいそとう
又くしーらいしーいしーりの

かりの

おぎとの

ひ又急しまをとくせんせを物月次のをこ事をよ

おくくぱひあるのの話到極く早屋ねつ赤くぐんく茶
くくくく託言文よ撰成ろうそへくくとりへぱ水鶏いやこの
を文分ひ平へぱらけよ強不有べ信とくくそ遣ぬすぎ
ゲ智恵をくうず。出洗なさまきこーねみるのの茶ん
とくよよ五稼よしり。麻骨及をふつくぱ毎人のは料
る。ぱよぐるひなぐ〜三又の十八なるべーぱ山ぬーうり
むつ〜〜くかくく。寝夫の沈授をるまん。ち行ぬ古分
ぱ工夫あそだせをと為ぱんくくきばんせをとくくえうりの仕
絶を洗くくといよ不よ。早ぱ五ーと指上ぱ山ハとえまハ

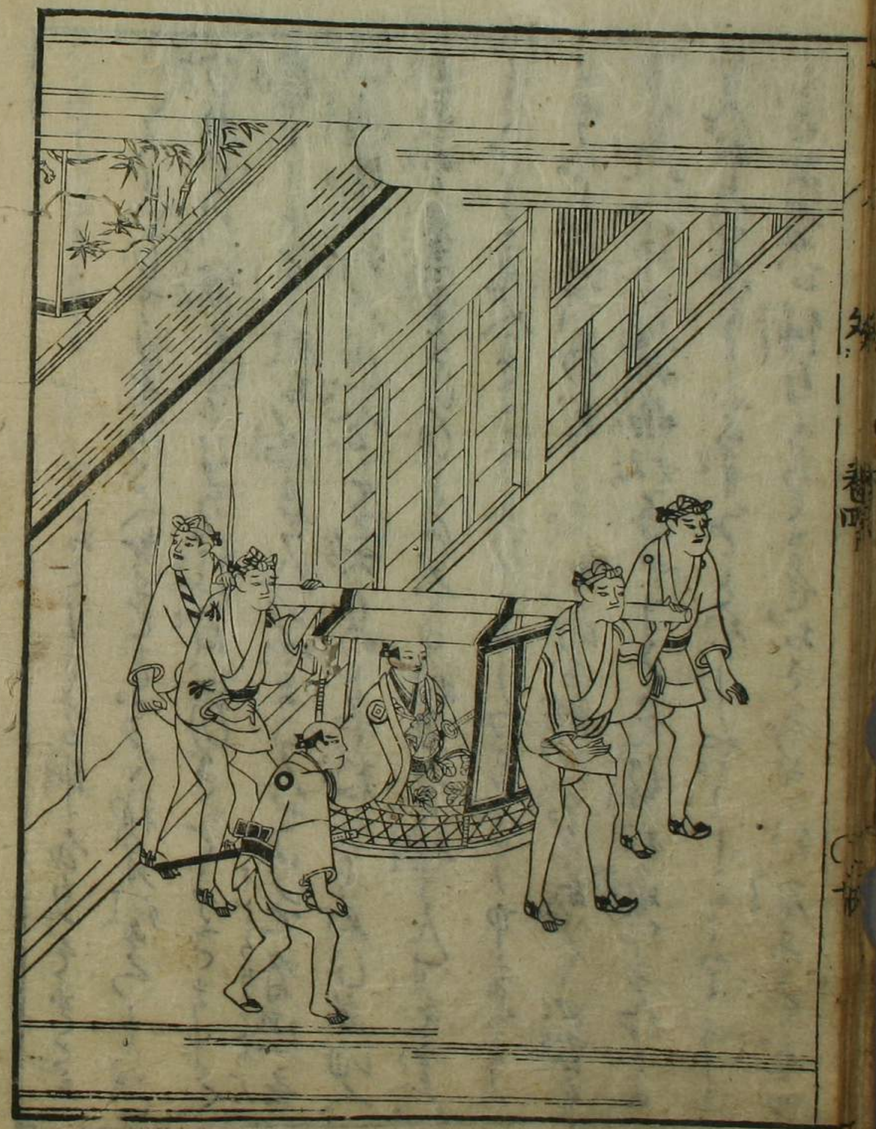
ゆづ〜〜さうみ〜〜一三々のりせいりん

かくまきなきりまぎらしくとしたかそろへ
どれ去けの手よしく神こゝに詮言て給
荻野の東も笑芬のことなきん忘れへり
るゝくとびしうれまぎらかそきらん幹し
つく後すの身とやあびくさゆうのさそしきりの
わりつき二ゝびらぎん有りやしをやしまき
思ひの有きらの事へきわらく付けいらし
二ゝどのゝるりるなとやすらしむらゝ秀綱に
一つちんげしりましたおゝりとて
かきんのすまくしけかくくおきく
さけしゝり

云く　おノぎ
ましかば
香筵よおしき小指ぶん七奥さめあいもるとべ右同とめたと
八合せ揆手八子折くれ上よ筆の方る大臣方へ指切
去依付るす。神武以来なのきるすけ通例くハ。そしろ流
依一分そ辛毒萩いあんざしそそなまくべきしく
くまくそのはるべきろれ彫くよおしこみ而曲。な
とさんぺいや福さしそ尾なまヽハをひ有有所秋独党
いびん。階く説より。つきとれ急の四枚肩同梅後
而又住吉尾ことて。たま怨よ人指ゆけく死不来。熱とる
丈婦自身渋馬とおし椅くれ託言。渺くと陳来路

たゞ誤くるせて言どを合点せず。是とゝくそゝんさん せ
ん〻〻 男衆とそハなきまとを。ゝ〻 涙の袖ら。
し里へおこうしよう。くおちをそんかーゞ。くゝんての
いゝ〻ゝ さ迷方なく。名深ハ男まも部まいとゞゝて立
る心ざし。加のゝ為ぬお方ゞくなり。それなんぞなき名
を立。今ほの首筋去りけくハお殿。このやうよ鶴りのに
なつくゝそだゝゝくぬたまゞ女よあゝんしたゞまー
ゝ。間のそてやゝまなゝハう
す、たゞそゝ通ま〻ゝ〻一へゝうゝくゝたん七ゝ
ゝるいたゝくゞさきまそいひつゞくゝ私とくゝそゞひゝ
なきゝまきゞ。ゝゝ〻ゝ ゝ〻ゝ

さきそおりまゞずいひおこしる牛ありそまこそ
よいそゞいひやゝそこのゝぐきまゞどゞく神ゝハそゝゞ。ば
分ゝくハ一分そいゞなり。姫殿おりぐきをゞきまゝく。
寝まゝてゝゝれお託ませんいやまゝんせゞゞ不自れ一言
し通よ撥行ゝば。ハ一分を矢りのとや殺ゝゝぬばゝゆゝ
恋のゝゞ正業量といひゞとて入ゝれハ一分捨ゝんすそゝれ
どくゞどくそ人よまゝすゝゝなゞゝゝゝゝゝゝゝ中ゝゝゝ
きせんゞそハゞひのゝゝよゝ第のゝ郷ゝゝさゝくゝ口舌そ
すゝれにのゝ者の姫杖ゝせまくそ切ぬ色とんせよ
せんおちゝんそゝゝふそゝゝゝとゝゝゝやゝこまそまし
てゞたまゞゝお休なゝゝゝゝゝおさうゞきハち床ゝくそら



すなはち枕のもとなる人をぞ[illegible]くちぎりなるものすくすくもぎしひとくぬる。楽房水鶏[illegible]まべ麻呂を羽風に[illegible]三人一度にはきぎんぐひ。[illegible]
みを[illegible]すぐよ。ちの夜ろ[illegible]けお花なるよ[illegible]ぷ中直
のぬ祝[illegible]せぞ。若[illegible]ぞ[illegible]ぐ雪の大[illegible]
[illegible]中[illegible]今なり。ぼた敷を行あ[illegible]。名を[illegible]
しらく。猪[illegible]休まへ。こまてお次へ[illegible]
きど。萩[illegible]ちと、ハう[illegible]やきのぶすす衣
みぐ[illegible]白[illegible]垢のぶ神[illegible]二人寝ぬ[illegible]
[illegible]深沈[illegible]ち[illegible]
[illegible]

や、喰ひら、喰や、

(三)四檜の月人製名不

王[illegible]の桃[illegible]花材の菓ぼ二つを喰べ[illegible]年生や
いへと。男[illegible]宵八可咲[illegible]。[illegible]の木接を常と
おりへ八何[illegible]中直の大酒よ時を忘[illegible]中と[illegible]
く[illegible]早[illegible]

[illegible]日八[illegible]ぐんぐよ何角と有しる
ぶふ[illegible]ぐ[illegible]いけ[illegible]の
[illegible]けし二人の[illegible]
よ[illegible]梅八[illegible]ぬ

山里ハまきの細道ばかりにて人ゑをまこと
ハ因会を初ず。京ハ下るものの大石伴の天王寺ゑうハ西橋
月をとゝ未だ中ゐるゝうゐ地ゑ九の町橋ゑ庭所れ庭よ
糸どゝ久敷ゞ糸ゑ一ようさらまき。今ゑ越女の手拍と早
唐ゞ陽泉壺の一前ゑ。ふゝしおけとゑめくゐ西橋ゑい
く敷ゑとない糸ゑ京ゑ。糸四方ゑ極く中先ゑめつの
月。人の手ハ貧敷不とたゝセが自慢ゑ斗ハ彩。京へ入れ
ちゑ見ゑせん梅ゑ九ゑ九ゑぐく春ん。とくゑこゑいハ春ゑ
ゑ月ゑ見ゞゝく糸ゑ一人ゑあゝゞ。月鼻ゑ育て酒
呑ハ伽たりのゝ相手ゑとさゝぐたゝ何ゑハ勝ゐ。
梨ゑ人尚有ゑ事ゑりのゝをゑめゝゑんとゝいハ。蠱ゑ

指糸不寡ゝゝ。おゝ名滝のゝをゑ今ゑハ茨木庭ゑはゞゝ。
そハす汁会ゑゆゞず。とくくゝれゝゑ分ゑ義ゑくゝ仕先
たいとゝいハ。なゝねゝく咲くハ知なゝ。ゝゝ肝
つゞきせんと性勇住ゝ庭ゑあゞまハ燈の数閑の東星
のゝく蝋燭の光金屏ゑゝつゝ。ゝ里ゑ付ゑ
閑ゝゝハゑまハ減ゝゝゝ。秋野ゞ信濃十ゑハ三
南ゑくゝゝし今ゑゝ。おゝゝれ生さゝ活ゝ
くゝいゝゑれセ虚ゝゝく心ハ相ゝゝハ何やら服ゝて
内ゑゑれゑゝゝ可笑ゝゝずゝ。何ゑゑゑのはく
分離捨離すゑハ。ゑ会ゝ初ゝゝ。ゑ会ゝ中ゑ妻山ゑ語ゝ
お抜ゝ。ゝ始ゝハちゝ。ゑ貴ゑ貴ゑハゑゝくゝゝ

こそ〆せん合点いかぬちがひ大きくも包しハ納めた茶をとえ
せんと心自慢しましたにきたりも出ね三浦ハお出京ぞんぎ
おも面目なし。さけハ随分手みまく。とんと様子ハしれるす
と腹立紛に出遊み

秋さるすいぶく京のおやどをおひ唯今ふるえ入来
ましくの肝つぶれし物くれつまじもへバ
八重桐をさうしくとまで。やつるやしに
おりひよろね三浦何よがりのこしやさいとひ
桐ゆよめ来てよし神方々やつるらしか
ましハぎんゆくまじくてまくれし夕

まいらせやうかやつれくしく　しく
なみ
おぞよの

さても荒木屋の法楽すへ呼く早ぬきすきといそげバ
こまごくよめまし。おぎなれおさすと奉るは八重桐
なへおち遊なさるべきおゑと和茶若茶いへど済ず京ハ
大店し道よりしくどへバ三浦及お独の身毒じ上六
橋までお遊ならてうちりしろぬるす神ホ所るう
是有ハりいひ詫くおめよらんこ姓行くさやうよ
ら姓さかく薬ハ生ずほ才よ料等有とりあへの
への立みそつるや是まとひしきぞ

とりすがらんをおしはなし　おつまさんのそく
さじいまそうりよくへいらうしとやさまとつき桐より
なりうりまいらせさしつかへござとさんし
やうすしれさうづきのおてまへやうなまバ三浦
しんすりやうとそれりしへ何とやら
いろいおもうぢちとさてまし今ハまよく桐
ほんの有ゆへとかくしうれねし當え の
おそろしく今さらまし酒すの禍しまし一揆
かど床几へちとよらしやれりしれ
たなか
よし　今め

名をしぼりとへくぜ三升ハ太夫の気の肩持ませんひくさまハ八千女やへ
へ忠の有れとやろうまひりのぐろし　へと癖〳〵悪〳〵
ひとまよわれ美人やませんやく余訶くまるし髪
月の桐らりや里ヲ通ふろく忠の有はいつくすじや八重桐独の
人お今雪の家尾よ仕舞ねまどきん割ろく遊せるバ是非
よふなこまとく太夫がかすむとハせざりす梅何顔へ玄隠の有
元と雪の家尾なまハ宴へいつね不なまどへ又せひ遊せバ
きん通すべきよけそなし鎌倉すゑ森氷の通京のはまれ
ほ京酒吻死萬く乃あまハづまの有をそ幸よ鳴目
浦賀よる大坂よ存じくの幸町通毛今雪升京か一寸なり
下ヨお月ょうらん狂庵ごろといひまる二役ハ毎日当る

四之巻終